Palestine

『ガザ・モノローグ』朗読

パレスチナの声なき声に

朗読台本：生田みゆき
翻訳監修：渡辺真帆

2024. 2.23（金･祝）

	朗読
ひどく静かな夜 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：溝川貴己	滝沢花野
サッルームの誕生日 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：原口昇平	鍛治直人
物語はまだ終わっていない 作：ヒバ・ダーウード　訳：辻 愛麻	滝沢花野

2024. 2.24（土）

	朗読 I	朗読 II
わが友ジャンへ 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：梅津尚子	志賀澤子	森岡正次郎
どこをみても死 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：溝川貴己	沖中千英乃	鹿野真央
一瞬 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：梅津尚子		日下 諭／織田あいか
わが書斎へ 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：原口昇平	手打隆盛	日下 諭
サッルームの誕生日 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：原口昇平	髙山春夫	田代隆秀
ひどく静かな夜 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：溝川貴己	武田知久	西村俊彦
戦争の長い時間 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：梅津尚子	滝沢花野	石村みか
ラマー 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：溝川貴己	亀田佳明	西尾友樹
死について 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：渡辺真帆	椎木美月	宮﨑優里
ガザから、親愛なる友人シェイクスピアへ 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：溝川貴己	椎名一浩	
ガザ市からラファに追いやられ 作：ターミル・ナジュム　訳：梅津尚子	岩男海史	堀 源起
ヒバ・ダーウードの証言 作：ヒバ・ダーウード　訳：原口昇平	水野小論	長尾純子
戦争は終わるだろう 作：アリー・アブー・ヤースィーン　訳：山口 勲	梅村綾子	橋本千佳子

“The Gaza Mono-Logues”（ガザ・モノローグ）は、パレスチナ・ヨルダン川西岸地区に拠点を置く ASHTAR Theatre（アシュタール劇場）の企画です。
ガザ・モノローグ日本語訳を読みたい方、この運動を応援したい方はこちらから →

わが友ジャンへ

2023 年 10 月 18 日

ガザについてなにか綴って欲しいというあなたの手紙を読んだ時、いつもならすぐに返事をするのに、今回は何日も沈黙してしまった。今は言葉がない。なぜって？
今朝、狂ったミサイルが隣の家を破壊し、その瓦礫が我が家に飛び散ったにも関わらず、私と家族が奇跡的に生き延びたからかも知れない。今の状況があらゆる言葉を凌駕してしまっているからかも知れない。或いは、もう語ることに意味があると思えないからかもしれない。私たちは 75 年以上、イスラエルによる日常的な殺人、包囲、そしてテロにさらされてきた。その度に、自分たちの正当な権利について声を上げてきたのに、誰も答えてくれなかったではないか。

友よ、昨日、イスラエル軍はガザのアル＝アハリー病院を爆撃し、現時点で 500 人以上が殉死している。彼らはバラバラに切り刻まれ、肉の山となった。
劇作家なら、ギリシャ悲劇「アンティゴネー」を思い出すだろう。クレオン王がアンティゴネーの兄の埋葬を禁止する。しかしアンティゴネーは、自分の目の前の遺体を埋葬せず、野ざらしにすることに耐えられない。彼女は訴える。人間であるとはなにを意味するのか。尊厳とは、価値とは、権利とは？　アル＝アハリー病院の虐殺された、頭のない、手のない、あるいは足のない遺体は我々の時代の新たな悲劇となった。

アル＝アハリー病院の瓦礫の傍で年配の女性が看護師にこう話しかけたという。
「あなた、そこに転がっている手を私に頂戴。指輪でわかったの、それは娘の手。今朝、私が椅子に座るのを助けてくれた手。テレビを付けてくれた手。娘は家を出る前に私にキスをしてくれた。いつも私を優しく抱きしめてくれた。髪をとかし、爪を切ってくれた。その手は、私の力の源だった。娘に最後のキスをさせて頂戴。そうすれば、私は娘の身体の破片をこれ以上探し求めなくてすむから。」

友よ、私はもうなにを書けばいいのかわからない。これが「言葉を綴る」ことだと言えるなら、あなたの周りの人に読んで聞かせて、私からの感謝の意を伝えてほしい。大きな人間らしい心を持った、誠実で自由な人間は、近頃とても少なくなってしまったから。

この手紙をガザから、愛してやまなかったパリへ。大好きだったラヴァルへ。いつか会おう。この地球上の他の住民のように私も自由になった時に。

アリー・アブー・ヤースィーン

どこを見ても死

2023 年 10 月 10 日

やや遠くの方から砲撃音が聞こえる。子供達が怯える中、エジプトにいる従妹からの電話が鳴った。

従妹 「もしもし、アリー、もしもし」
僕 「どうしたんだ、泣いたりして」
従妹「アリー！　息子が、イッズィッディーンが！！」
僕 「イッズがどうしたって？　（子供に）よしよし、大丈夫だよ。（電話に）ごめん、子供が泣いてるからよく聞こえなくて。」
従妹「イスラエル兵に頭を撃たれたの。シファー病院にいるって。2階の手術室。」
僕 「落ち着いて。確認してくる。君はいつエジプトから戻るんだ？」
従妹「明日の朝」

ミサイルが私たちの隣に落ち、家が激しく揺れる。

僕 「なんて？ よく聞こえない！！」
従妹「エジプトから検問所を通って、明日の朝にはラファに着く」
僕 「わかった、迎えに行くよ。（*電話を離して*） イマーン、子供たちを抱いてやってくれ、怖がってるだろう。（子供に）ほら、チョコレートをあげよう。（電話に）もしもし。とにかく病院に行く。気を確かに。神のご慈悲がありますように」

イッズを探しに病院へ向かう。医者を見つけて声をかける。

「すみません。イッズィッディーン・ヤースィーンという頭を撃たれてけがをした青年を知りませんか？」
「頭を撃たれた？　じゃ第二病棟でしょう。ここはもっと簡単な手術だけだから」

簡単な手術。半数の人が四肢を切断されているのを見る。あぁ！辺り一面に死の匂いが漂っている。死に匂いがあることを初めて知る。第二病棟に向かう。

「先生、イッズィッディーン・ヤースィーンというけが人ですが…」
「彼ならここで手術をして、今は別の病棟だ」
「あの、先生、お顔や首に、血しぶきが沢山ついてますよ。拭いた方がいい」

急いで別の病棟へ行く。これはなんだ？　患者はみんな、同じ姿だ。みんな包帯を頭に、胸に、手に、足に巻いている。どうやってイッズを探せばいい？　神よ！死の悪臭が鼻を刺す。死に匂いがあることを初めて知る。
爆撃の音は止まないのに、ここは、墓場よりももっと静かだ。一体どこを探せばいい…。従兄のアブー・アブドゥッラーに電話してみよう。彼ならわかるかも。幸い彼はすぐに電話に出た。

「もしもし。イッズはどこか分かりますか？もう僕は眩暈がしてきて…」
「ああ、あいつは手術病棟だ。容体は安定してる。2階の男性用病室に移動した。
看護師に尋ねれば、部屋に案内してくれるだろう」

そしてとうとう、イッズのもとにたどり着く。

「あぁ、君が殉死したんじゃないかと思った…本当に心配したんだ。」
「神の祝福を、おじさん。（笑って）俺の頭は弾が貫通できないくらい強いんだ」

私は彼の母に電話する。

「もしもし。君の息子は隣にいるよ。イッズは無事だ。生きてる」
「ありがとう、ありがとうアリー、息子と話をさせて」
「ああ、じゃ明日会おう。神のご加護がありますように」

イッズの病室を後にして家に向かった。ああ、神よ、死の匂いは街中（まちじゅう）に漂っているじゃないか。病院の中だけだと思ってたのに。どこを見ても死がある。

アリー・アブー・ヤースィーン

戯曲『一瞬』

作　アリー・アブー・ヤースィーン

ガッサーン(G)が友達のサーラ(S)に SMS を送っている。

Ｇ－「サーラ…　僕は自分の家だ…　そっちは電波ある？」

「サーラ…　どうかした？」

「返信してくれよ、ふざけてないで」

「なら車で君の家に行くよ。本気だ。もう耐えられない。」

「頼むから何か送ってくれって。」

わかった、今からそっちに行く。

ガッザーンはドアを開ける（ガチャ）

Ｇ－　え！　どうなってんだ？ドアを開けたら、君が目の前にいる！ガザ市にいたんだろ？なのに、どうやって来たんだ、こんな一瞬で。海沿いの通りは午後４時以降、通行禁止だろ？危険すぎる。家族にどう説明したんだ？

Ｓ－違う違う、私があなたのところに行ったんじゃなくて、あなたがこっちに来たのよ。

G－え？ でも僕がドアを開けたら、目の前に君がいたんだよ？

S－ それは私が殉教したから。

G－ 殉教した？でも君は僕の前で、こうして話してるじゃないか。

S－ それはあなたも殉教したから。（間。ガッサーンが笑う） なに、信じられない？
私たちの…友情に誓って言うけど、私たち、死んだの。

G－ でもそんなの聞いてないよ？ 大体殉教者の名簿に君の名前はなかったし！

S－ それは誰も私が死んだのを知らないから。

G－ どうして？

S－ ミサイルで、身体がバラバラにちぎれちゃったから、私の「遺体」は誰も見つけられなかった。

G－ そんな！じゃ埋葬もされなかったの？

S－ 埋葬はされたよ、通りを歩いてた他の人たちと一緒に。皆、私みたいに粉々にされちゃって身体の一部…手の半分とか、脚ほんのちょっととかが回収された。そう、一番大事なのは頭！ それがあってようやく一人の人間の死体だって証明されるから。そういう身体の断片が集められて、一緒に大きな袋に入れられて、「身元不明」って書かれるの。50 体の死体が一気にまとめて葬られる。私もそうやって葬られた。

G－ …それで、僕は？

S－ 僕は、って？

G－ 僕は、どういう状況？

S－ あなたもミサイルで粉々にされて、隣の地区までふっ飛ばされた。

G－ なんで知ってるの？

S－ だって、そこに立って見てたから。

G－ なんで警告してくれなかったんだよ！？

S- 無理よ、私はただの霊だから。大声で叫んだけど、届かなかった。あなたの頭を両手でつかんで、本当に心の底から叫んだのよ。

G- 心の底から？　なんて？（愛の言葉をやや期待して）

S- なんて？…あぁ、ただ叫んでたってこと。「あぁ（叫ぶ）！」って。

G- で僕は白い布でくるまれたの？

S- 殉教者はくるまれないでしょ？

G- そんな！ 救援物資のトラックはあんなにたくさん白布を運んでるのに！

S- 残念ね。

私さ、自分が死んだら大々的に発表されると思ってたの。偉大な詩人、サーラ・マフフーズが旅立った！って。メディアとか、SNS で。なのにまさか！私についてのニュースなんてなんにもなし。

G- そんなの僕よりましだろ。

S- なんで？

G- 僕は今死にたくなかったし、こんな死に方したくなかった。ドアを開けて、通りに出て、君のところに行きたかった。サーラ。

S- 私のところに来て、なにがしたかったの？

G- 死ぬ前に君と話したかった。死ぬのは怖かった。

S- なにを話したかったの？今話せばいいでしょ。

G- もう手遅れだ。

S- 大丈夫、話してみてよ。

G- なんていうか、つまり、僕が言いたかったことは、君の目をきちんと見ながら言うべきようなことだった。それか、君の目から逃げながら。長い間隠してきて、ずっと先延ばしにしてきた話だから。…なんてことだ、戦争は建物を爆破したように、美しい言葉も粉々にした。

S- …その言葉を口にしてくれるのをずっと待ってたのよ。毎晩、それを夢見てた。

G- 僕の気持ち、わかってた？

S- そんなの、目を見ればハッキリと。

G- ああ、本当に馬鹿だった！　どれだけ君が好きだったか、どんなに夢中だったかきちんと言葉にしておけばよかった。サーラ、君は僕の命、君なしの人生は考えられないって。

S- 愛しいガッサーン、私の恋人になるのはあなただけだと思ってた。あなたの愛の言葉を待ってたの。あぁもう最っ悪！このマジで空気読めてないクソ戦争が、私たちの人生の、最高の瞬間を奪いやがった！

ガッサーン、私もあなたが好き。この宇宙に存在する全ての愛を持って、あなたを愛してる。この愛はミサイルの音よりずっと大きい。ミサイルを撃ち込んでくるあの人たちの心にある憎しみよりもずっと強い。

G- 出発しよう、あらゆる死と破壊から遠く離れたところに。悲しみと痛みで溶けてしまった心から、遠く離れたところに。

神よ、どんなに大事な故郷よりも、私たち人間はかけがえのないものだとあの人たちに理解させてください。この世界全部だって、愛しい人と結ばれることが叶わなかった一人の人間の魂には値しない。なんの罪もなく死んでいった一人の子供の魂には、この世界全体すら見合わない。

他の人間の運命を支配し、占領することを良しとする人間が、文明人を名乗るだなんて、全くおかしな話だ。

さぁ行こう、サーラ。ここではないどこかに、もっと愛のある場所があるだろうから。

2023 年 10 月 29 日

わが書斎へ

2023 年 12 月 31 日

許してほしい。何ヶ月にもおよぶ戦争のせいで、おまえから離れざるをえないんだ。
戦争とそれがもたらす不幸の意味を知るには、おまえはまさにうってつけだ。だっておまえの中にはレフ・トルストイの代表作『戦争と平和』が住んでいるんだから。だろ？　ブレヒトの『肝っ玉おっ母とその子どもたち』を上演しようとした時には、何度も何度もそれを読み込んだ。おまえは自分の子どもを守る母親の勇気と胆力を手に入れた。だから僕は、狂った戦争がおまえを傷つけることを心配していない。ここにあるすべての本と戯曲を、お前が守るべき子どもだと思ってほしい。

わが愛する書斎よ。知ってのとおり、わが家への電力は遮断されている。料理するにも、パンを焼くにも、燃料がない。まるで干し草の山の中から針を探すように、人びとは木切れひとつ、段ボールの切れ端ひとつを探し回っている。だからお前から、人々が本を持っていくことを許して欲しい。それは命をつなぎとめるためだ、子どもに食べさせるためなんだ、この本の著者たちは、人びとのために自らの身を捧げてくれるはずだ。
親愛なる友チェーホフ、アルベール・カミュ、ジャン＝ポール・サルトル、ジャン・ジュネ、シェイクスピア、マフムード・ダルウィーシュ、サミーフ・アル＝カースィム、ガンナーム・ガンナーム、アルフレッド・ファラグ、アーティフ・アブー・サイフ、 ムハンマド・アル＝マーグート、 サアダッラー・ワンヌース、

スタニスラフスキー、アウグスト・ボアール、おまえの本棚に座している偉大な著者たちはみな喜んで燃える灯火となり、人びとの腹を満たすだろう。
彼らの言葉は、世界と僕らが、頭よりも心に刻みつけている。だから書斎よ、おまえのことは心配していない。ただ残念なのは、自分の成長のためにこれらの本を求める人びとが、もうそれを読めないということだ。

わが大切な書斎よ、大切な、大切な書斎よ。覚えているか？ 1993 年、カイロで開催されたアラブ演劇パフォーマンスフェスティバルに参加した日。他の参加者たちはみな家族へのお土産を抱えて帰る中、僕は自分の大きなかばんに、最高にそそられる演劇関係の本を詰め込んだ。重くて、道中大変だった。やっとのことで帰宅したとき、お土産を期待して出迎えてくれた妻と子どもたちに僕が差し出したスタニスラフスキーは、ほほえみながらこう言った。「わしに免じてこの演劇バカを許してやってくれ」

わが愛する書斎よ、僕を待っていてくれ。すぐに帰って来るから。そのときは夜を明かして探求しよう。人間の魂を、素晴らしくも不思議なこの世界を、言葉の奇跡と美を、そして輝かしくも偉大な本の書き手たちのことを。

アリー・アブー・ヤースィーン

サッルームの誕生日

2023 年 12 月 20 日

私の 2 歳の孫娘の名前はサラーム、愛称はサッルームだ。「平和」という意味をもつ名前の通り、いつも穏やかだ。色白で、瞳はみどり色。泣くことはめったに、本当に、めったになかった。
それが今では毎晩、叫びながら目覚める。しかも一晩に二、三度。夜中のこの子の叫び声で、私たちもみな目覚める。ある者は悲しげな表情を浮かべ、ある者はシオニストを呪い、ある者はコーランを読み聞かせてやろうとし、またある者は水を飲ませてやろうとし、またある者は「悪霊を払ってもらいましょう」と言う。そこで母親が答える。「この子がおびえて目覚めるようになったのは、お隣のアン＝ナアサーンのお宅が爆撃されてからよ。」

そう、隣の家に爆弾が落ちた瞬間、自分のベッドで寝ていたサッルームの身体は一メートル以上も飛び上がり、彼女は恐怖の叫び声を上げた。それ以来、叫び続けている。

サッルームの叫び声は伝染する。他の子どもたちも一緒になって叫び始めるのだ。すべては、戦争のせいだと分かっている。この子が叫び始めると、私たちも一緒に叫びたくなるほどだ。

今日はサッルームの誕生日だった。一緒に暮らす子どもたちは、朝から集まって、最高の誕生日にしてあげようと話し合った。まず皆で泥のケーキを作り、サッルームを囲んで「ハッピー・バースデー・トゥ・サッルーム」と歌った。
妻と私は、この世の悲痛さをかみしめながら、子どもたちを見つめて言った。
「神よどうか、この子たちの毎日が私たちの毎日よりもよくなりますように。」

サッルームは、泥のケーキに立てた見えないろうそくの火を吹き消した。それから、いろんなものをプレゼントしてもらった。中庭にあった割れた植木鉢は、キャンディーボックス。木の破片はバラの花束。泥まみれの破れた布は、最高級のドレス。サッルームは皆からの贈り物と祝福のキスを受け、幸せで心と瞳をいっぱいにしていた。

遠くから見守っていた彼女の父親は、たとえどんなに時間と労力がかかろうと、自分の娘に本物のケーキを作ってやろうと決意した。市場へ出かけて卵、小麦粉、このところ入手困難なバニラエッセンスを探し求める。道という道を歩き回り、ようやくケーキの材料を全て手に入れて戻ってきた。
自宅を失い親戚の家に身を寄せている私たちには、調理用具が一切ないので、パンを焼いている隣の家にお願いしてバースデーケーキを焼いてもらった。そして日が暮れるころ、息子はケーキを抱えて、まるで博士号を取ったかのように誇らしげに帰ってきた。
私たちはまた子どもたちを集めて、本物のテーブルを運び、サッルームのために歌をうたい、ケーキの上に何枚かクッキーを載せて、切り分けてやった。みなあっという間にたいらげてしまった。

サッルームはベッドで眠りにつき、そして恐怖でまた叫び始めた。私たちはこの子を落ち着かせようとしたが、その甲斐もなく、夜が更けた今もなお安らぎを得ずにいる。

誕生日おめでとう、愛するサッルーム。どうか末永く生きてほしい。

アリー・アブー・ヤースィーン

ひどく静かな夜

2023 年 10 月 10 日

ひどく静かな戦争の夜。昨夜は本当に静かだった。一時間くらいはまどろむことができた。ドローン、戦闘機、砲撃の音がずっと聞こえていたけど、ミサイルや1トンの火薬が一気に降ってくるのに比べたらどうってことない。1トン爆弾が地面を持ち上げ激しく揺さぶるさまは、まるで、ぱんぱんに膨れた子供の風船だ。今にも爆発して世界を破壊してしまう。死を千回目撃したら、次は自分の番だとしか思えない。爆発と死を待つ私に残された時間は、せいぜい1分か、1 秒か。

本当に静かな夜だった。あまりにも静かなので、私たちは、30 人で豆の缶詰を2つ、夕食に食べることができた。信じられない贅沢、まるで豆を讃える大パーティー！けれど、パンが足りないのでパーティーは台無しだった。実を言うと、私がパーティーを台無しにした張本人だ。

夕食前、通りに立つ私の前に、二人の少女を連れた男がやってきて、「パンを恵んでくれ」と言った。「パンだけでいい、娘に食べさせたい。もう3日も食べていないんだ。」「パンはない」最初私はそう答えた。しかし、私を見つめる少女たちの瞳が、まるで弾丸のように私の心に撃ち込まれた。私は手元にあったパンの半分を差し出した。その時の様子を、私は死ぬまで決して忘れないだろう。

彼は震える手でパンを受け取り、少女たちの瞳は輝きを取り戻しはじめた。彼は私にお礼を言うとすぐに立ち去った。まるで、誰にも見られたくない貴重な戦利品をもって逃げるかのように。

時に静けさは退屈になる。特に、真夜中に友人からの電話で、幼馴染のアドナーンとその家族が殉死したと聞いたとき。アドナーンの娘、やんちゃなサマルをどれほど私が愛しく思っていたことか。彼女は３歳にもなっていなかった。私が遊びに行くと、サマルはいつも走って私の首に抱きついた。黒い瞳、縮れた髪、年に不似合いな背の高さ。サマルはバスケのチャンピオンになるに違いないと話したものだ。

本当に特別な夜だった。電話を切る前に、私の意に反して涙があふれ出していた。

大きな爆発の音でハッと目が覚めた。続いて聞こえたのは、トタン屋根の上に、激しく雨の降り注ぐ音。いや、違った。それは雨ではなく石が屋根を突き抜けた音だった。ここからほんの20M離れた建物が、何千もの破片になって砕け散ったのだ。一瞬で大きな穴が出来、そこに数十年前から生えていたナツメヤシの木だけが、奇跡的に残っていた。まるで、すべてを目撃するために死ぬのを拒否しているかのようだ。ただ、胸に抱いていたヤシの実はほとんど落ちてしまったが。

なんという致命的な静けさ。アルジャジーラの特派員がこう言った。「戦争開始以来、最も激しい攻撃が行われています。」静寂のお陰でちゃんと聞こえた。頭がおかしくなりそうだった。この恐ろしい静寂の最中で、私はどうやって言葉を紡いでいるのだろう。いつ死んでもおかしくないのに、私はそれを悲劇だとも思わず、座って文章を書いている。まるで、私の周りで何も起こっていないかのように。私の周りで、地面は揺れ続けているのに。火薬の匂いが鼻腔を満たしているのに。煙が口を満たし、時には家に充満する。爆発は止まらない。もう狂ってしまった。そう思う。あるいは死にかけている。

私は最後の一文字まで抵抗する。私の声を世界に届けるために。雑音に満ちた世界。その世界に私たちのような静寂がないことを願う。あなたたちは自分たちの騒音を楽しめばいい。私たちのニュースから、顔を背ければいい。チャンネルを変えればいい。あなた達は不快な思いをすることを恐れている、目を醒ましてしまうことを恐れている……。さ、どうぞ心地よく眠ってください。

アリー・アブー・ヤースィーン

戦争の長い時間

2023 年 11 月 8 日

戦争中、人は多くのものを失う。それ程大事でないもの全て、贅沢品の大半、必需品のほとんどを。そして本当に、本当に、本っ当に必要なもののことだけ考えるようになる。
Facebook に興味がなくなり、誰がイイねしたかなんて、気にもとめなくなる。「一緒に回復を祈ってください！」の言葉と共に投稿される、入院中の家族の写真も消える。だっていまや医療は崩壊し、死体は道端に転がり、埋葬すらできないのだから。
美味しい食事の写真は載せることすら憚られる。だって多くの人々が何日も食事を取れず、小麦粉を求めてかけずり回っているのだから。
いつもの癖でアプリのボタンを押したとしても、友人の死を知らせる投稿に、書き込みすらしなくなる。なぜなら投稿のほとんどは、死か負傷か、死にかけたがなんとか生き延びたことを伝えるものだからだ。

ガザでは多くの人の楽しみだったゴシップも、嫉妬も、他人に対する執着も、一切合切消え去った。みんな朝から晩まで、家族を食べさせるために駆けずり回ってる。お世辞、偽善なんてものは全てなくなった。自分がいつ死ぬか分からない時に、そんなものに費やす力は残っていない。
そしてかつて自分のすぐそばにあったものの価値に気づき、それらがとてつもない喜びだったことを思い知る。

例えば朝、ストーブの前に立って、チョコレートをかじりながらコーヒーを飲むこと。いまやコーヒーは、元の 5 倍の値段だし、チョコレートは他のお菓子と一緒に、何週間も前にガザから消えた。店に残っているのは、ちょっとした洗剤くらい。

「バヒッブーシュ」――「これ好きじゃない」なんて言葉は、今や誰一人使わない。蒸したカリフラワーが出てきたら、この世で一番美味しい食べ物かのように貪り食う。50 シェケル程度で作れる食卓のわき役だったものが、いまでは 150 シェケルもかかるので、貯金しないと手が出ない。マクルーバとムサッハンみたいな主役級の料理は、思い出すことすら憚られる。
一番恋しいものは自分の枕とベッド。ミサイルや大砲、銃撃の音を聞かずに眠れる夜をまだ夢見る。
車と渋滞が恋しくなる。今はロバが引く荷車に乗り、座席代わりの麻袋に座る。たちまちズボンに埃や水が付き、降りる時にはお尻にひまわりの形の丸いシミができる。
テレビ、映画、トークショー、演劇なんてもはや遠い夢。自宅のダイニング、バスタブ、窓、優しい隣人たち、市場、その辺をぶらつく朝の散歩がすごく恋しい。クローゼットの服、靴。冷蔵庫、そう、果物がたくさん詰まってた、あの幸せ。

戦争で家を失ってから、私たちは土と藁でどうやって窯を作るのかを学び、色んな種類のパンの焼き方を覚え始めた。焚き火用の木の用意の仕方、オリーブの木とオレンジの木の違い、椰子の葉の重要性。
レンズ豆とそら豆が、食卓の主役に返り咲く。肉や魚は夢で見るだけだ。
心から感情が消え、誰が亡くなったかというような重要な話すら耳をすり抜けてしまう。いとこの殉教について、まるで買い物の話でもするかのように、なんの感情もなく家族に話す。

爆発が家を揺らしている、私は子供たちを抱きしめに行こう…

アリー・アブー・ヤースィーン

ラマー

2023 年 11 月 30 日

　戦車が家を砲撃しはじめたら、ただちにそこを離れなければならない。戦車は無差別に砲撃するから。悪意をもって破壊し、警告なしに人を殺すから。

「全く頭のいかれた怪物だ。見境なく建物を切り裂いていく……。」アブー・アフマドは服を入れたリュックと、大事な書類の入ったカバンとを抱えながら、そう考えた。この書類をまとめたカバンは、ガザのどの家にも常備されている。中に入っているのは、ID カード、パスポート、出生証明書、賃貸契約書、大学の卒業証書、そして UNRWA のカード。これが最も重要だ。このカードが、自身が難民であること、食糧支援などを受ける資格があることを証明してくれるからだ。

彼は、妻、子供たち、車椅子の母、孫たちを連れて、急いで自宅を出た。みんなで通りを走る。炸裂弾の音が耳をつんざく。火山が噴火したかのように、まわりに石が飛んでくる。アブー・アフマドは母の車椅子を押しながら、毎分毎秒、家族の無事を確認する。今は怪我なんてどうでもいい。転んで起き上がれないものはいないか？　誰もはぐれていないか？　彼の眼も脳みそも、忙しく動き回る。まるで千の目と千の脳みそが備わっているかのように。

彼らは走り続け、とうとう空爆地帯から抜け出した。一息つくと、次はサラーフッディーン通りを目指して歩き出す。ガザ渓谷の先の安全地帯へ、つまり

南へ行くためだ。
アブー・アフマドの頭には、テレビドラマー「アッ＝タグリーバ：故郷喪失」の離郷シーンが思い浮かんだ。悲しみを誘う音楽が流れる中、カバンを背負って亀のようにのろのろと歩く難民たち。彼は怒りを覚えた。おい、こっちはこんな急いで 6000mも移動したんだぞ。いやいや、ドラマのことは忘れて、進み続けなければ。

検問の戦車の車列が近づいてくると、突然人波に飲み込まれた。何処から来たんだ？　この人たちは！　あの難民追放シーンを撮るために、監督のハーティム・アリーは大勢のエキストラをかき集めないといけなかったらしい…いや、私は何を考えてるんだ。今は目の前のことに集中しろ。
更に戦車に近づくと、クワットコプターが飛んでくる。怪しい者は即座に撃たれる。絶対にやってはいけないことが 2 つ。立ち止まることと、手を下ろすこと。バッグを持っていても手は上げ続けなければいけない。もしバッグを落とし、拾おうと屈んだら、即座に撃たれて、殺される。

　アブー・アフマドは家族に呼びかけた。大丈夫だ、前へ進もう、手を離すな、もっとくっつこう。前へ前へ、足を止めるな。数分後には、戦車は道をあけてくれる。必ず、すぐに通り抜けられる。
　なんてことだ。まるでガザの人口が 200 万でなく 1 億人になったかのようだ。さぁ行こう。ゲートが開いた、急がないと。すると突然、戦車の上にいた兵士が言う。「お前、女の乗った車椅子を押しているお前だ、車椅子を置いていけ」「はい、今すぐ」アブー・アフマドは母を抱き抱え、戦車の間を通り抜

けるまで走り続けた。しかし、南部まではだいぶ距離がある。どうやって母を運べばいい？　車椅子を取り戻さなければ！　命がかかった決断だが問題ない。私の母が死ぬか、私が死ぬかだ。アブー・アフマドは母を地面に置くと、車椅子に向かって走っていった。シャハーダを唱え、いつ死んでもいいように身構えた。そしてどうにか、彼は車椅子を取り戻し、戦車が道を塞ぐ前になんとか戻ることができた。本当に最後の最後、封鎖される直前に。彼とその家族はまた走りはじめた。その間も、兵士の声はずっと「止まるな、止まるな」と呼びかけていた。

アブー・アフマドは家族を確認した。8歳の娘がいない、ラマーだ。彼は家族に声をかける。「ラマーはどこだ？　ラマーはどこにいる！？」。誰も答えなかった。すると息子のアフマドが言った。「戻らなきゃ」。狂ってる、奴らに撃たれるにきまってる。止まることは禁じられているのに、ましてや戻るなんて。息子よ、もう行こう。父親は無理矢理息子を引っ張りながら呟く。「神がラマーを守ってくれますように。ラマー。私の小さな娘、愛しい娘。」

南部を目指して歩きながら、ずっと、ラマーの姿が脳裏にうかんだ。彼女が生まれた日のこと、はじめて歩いた日のこと。眠る前には歌や物語を聴かせてやった。それからはじめて小さなカバンをもって幼稚園に行った日、ラマーはまるで色鮮やかな蝶のようだった。ラマー。私の心、私の喜び。私の愛するラマー。
彼は妻の声で我に返った。「ヌセイラートキャンプの入り口に着いたわ。このまま待ちましょう。誰かがラマーと一緒かもしれない。」

彼らは通りに座り続ける。ふと、行き交う人々の顔が険しく、埃にまみれているのに気がつく。その顔には、この世のありとあらゆる悲しみ、怒り、不条理があった。しかし、自分の家族の顔を見ると、更に険しく惨めだった。「神がラマーを守ってくれますように。」彼らは3時間じっと座って待ち続けた。

突然、人ごみが割れると、赤ちゃんを連れた男性が、ラマーの手を引いて歩いて来た。ラマーは一目散に母親のもとへと走ってくる。皆涙を流し、男に感謝した。
一家はハーン・ユーニスにたどり着き、UNRWA の傘下にある工業用建物に身を寄せている。破壊された自宅に帰る日を待ちながら。
実話。

アリー・アブー・ヤースィーン

死について

2024 年 1 月 12 日

死は、多くの人がもっとも恐れるものだが、この戦争のお陰で私たちは今や、死の秘密について語れるようになった。これは謎の地下室に大切に隠されていた、誰も知らない秘密。この秘密を皆さんと共有するために、私たちと死の関係が、戦争が始まってからどう変化してきたかを話したい。
戦争の始めの頃、近くでミサイルの音がしたら、闇雲に走って逃げ惑ったし、恐怖のあまりおかしな行動をとった。例えば布団を頭まで被ったり、歩く時に少し前かがみになったり。それで身を守っているつもりだったのだ。しばらくすると恐怖は薄れ、お互いの反射的な行動をからかうようになった。さらに時が経ち、あまりに何度も周りにミサイルが落ちたので、私たちはミサイルが落ちたら何が起きるのかを分析するようになった。

私たちの実体験で得た経験則、皆が気づいた大事な教訓はこれだ：
ミサイルの音を聞いたり、窓ガラスが割れるのを見たり、自分の上に石が降ってくるのを見た人間は、つまりまだ生きているということ。
なので、私たちはミサイルの音を耳にするや否や、「あぁ、無事で何より、今回は当たらなかった！」なんて言い合うようになった。
そしてミサイルの音を聞いていない、聞こえていない人間は、殉死者や負傷者だということ。致命傷や重傷を負った人は、ほとんどが何も

感じなかったと言う。ある人はこう証言する。「紅茶を飲んでたら、次の瞬間目が覚めて病院にいて、母さんが側で泣いていた。何で泣いてるのかわからなかった。」
この人は両腕や両脚を切断したのかもしれない。それか頭やお腹に砲弾が当たったのかも。空爆で即死した人は、何も感じないまま、永遠の眠りについたのかもしれない。
20 年前の第 2 次インティファーダの時、作家・文化人・芸術家が集まって血液バンクに行き、負傷者のために献血をしたことがあった。それを思い出し、2 か月前、私は親戚のために献血に行った。病院の血液科で献血を申し出て、ベッドに座っていたのだが…気付いたら床に仰向けになって、両足を上げられ、顔に水をかけられていた。気を失っていたのだ。友人いわく、私は 3 分近く意識がなく、もう 1 分続いてたら、死んでいたかもしれなかったらしい。もしそうなっていたら、私もただ眠ったまま旅立っていただろう。

死は生きている人の問題だ。誰かが死ぬと、生き残ったその家族や友人が苦しむ。記憶の中で永遠に生き続ける人もいれば、埋葬後に死ぬ、つまり忘れ去られる人もいるだろう。いずれにせよ、死が残酷なのは生きているからだ。

皆さんの安全と、この狂った戦争が止まることを願って。

アリー・アブー・ヤースィーン

ガザから、親愛なる友人シェイクスピアへ

2023 年 11 月5日

友よ、500 年以上の時を隔てて、どうやって今、私の目の前に現れたんだ？　悲惨な光景を見る度、絶叫を聞くたびに、君がこの目に飛び込んでくる。私には聞こえる、子供と共に泣き叫ぶ君の声が。母親の慟哭を分かち合う君の声が。君はハムレットの父親が亡霊となって息子の目の前に現れたように、瓦礫の下から子供のおもちゃを手にして現れる。教会の破壊を警告して鐘を鳴らす。破壊されたモスクの残骸の上に立つ。病院の中庭で、傷ついた者を助けようとしている。君はどこにでも現れる。まるで、今ガザで起きている虐殺、民族浄化を、何が何でも世界に止めさせようとしているかのように。

これは戦争ではない。別の何かだ。マクベスの魔女たちは「バーナムの森は、マクベス王の宮殿に移動する」と予言したが、まるで君は「ガザ市は完全な破壊と死ののちに海に移動する」と予言しているかのようだ。

バーナムの森が移動したあと、兵士たちには勝利が与えられた。ではガザは？　ガザの建物は壊され、いまだ瓦礫の下にある子供の、女性の、老人の、父親の、何千もの遺体は、破壊されたセメントと鉄筋と共に積み重なっている。毎度の戦争の後、瓦礫が一掃されるように、かれらの魂は、この戦争の後、海に流されてしまうのだろうか。

イスラエルの元首相、ラビンの言葉を思い出してしまう。「目が醒めたら、ガザが海に飲み込まれて消え去っていたらいいのに」。今起きていること

はすべて計画されていたのだろうか。 私たちはもう 70 年以上、自由のために闘ってきたが、シェイクスピアよ、君は自由の代償がこの街が海に移動することだと知っていたのか？　あぁ、もしこれが私たちが自由と尊厳を得るための代償だというのなら、感謝と敬意の念をもって支払おう。明るい未来への道なのだから。
私の友人マージドの肉体は 100m も空を飛び、アパートのバルコニーに落下した。これも移動に含まれるだろうか？　マージドの肉体を引き裂いたミサイルは、彼の家族親類 120 人も一緒に粉砕した。

シェイクスピアよ、どうして君は 500 年も前に「ロミオとジュリエット」で、私たちの争いを描き、警告することができたのだ。誰もが代償を払うことになる、いとこ同士の争いの醜さを。

　わが友よ、状況ははるかに難しくなった。ロケットの音は心臓を恐怖で慄かせる。硝煙の匂いと発がん性の煙は有無を言わせず人々の肺に染みこんでいく。国際的に禁止されている白リン弾は植物を焼き尽くし大地からあらゆる水分を奪う。愛する人がバラバラになるのを見る。来る日も来る日も、心は消しカスのように何千回も引き裂かれる。立ち上がってくれ、シェイクスピア。助けてくれ、わが友。本当に疲れたんだ。君の賢明なペンで抵抗してくれ。愛に、喜びに、革命に、人道に、希望に、自由に満ちた賢明なペンで。きっと、この青空の下で私たち全員が兄弟になれる。

アリー・アブー・ヤースィーン

ガザ市からラファに追いやられ

2023 年 12 月 13 日

どこへ行けばいいのか。もう疲れた。俺たちの生活はめちゃくちゃだ。走る。走る。目覚めた瞬間から走り出す。パン、水、わずかな食料を求めて。安全な場所を求めて。あっちこっちに走り回るけど、ガザにそんな場所はない。残念ながら。どこに走っても、爆撃される。どこでも、どんなときでも。

夜になると不安と恐怖が襲ってくる。みんなで寄り添って、抱きしめ合って、恐怖を忘れるために嘘をつく。こっちの部屋の方が安全かもって、部屋から部屋をうろうろ歩き回って、結局階段の下に潜り込んで「ここが一番安全だ！」って、思い込むことにする。

俺たちの日常がどんなものか、わかりますか？　不安と恐怖の中、ひたすら走る。毎日その繰り返し…で逃げきれた人は、自分が生き残ったんだと思う。でも、結局生き残るなんて誰にもできない。残念ながら。
一体これはなんのためだ？　世界は何をしているんだ？俺たちの命はここまで安いものか？　あぁ、確かにあんたたちは俺たちを「動物」って表現した。じゃ、アニマルライツは？ こんなの動物以下だ。

明日がどうなるのかわからないけど、俺たちが死ぬんだってことだけは明確に分かってる。自分が死ぬのを待つ間に、100 万回死ぬほどの苦しみを味あわないといけない。ならいっそ、全員、さっさと殺してくれ。俺たちはもう死んでるようなもんなんだから。

俺たちは過去にも現在にも未来にも生きていない。存在しない。人生で何も味わっていない。全て真っ黒、味も色もなし。
どうして俺たちが、常に代償を払わされるのか、理由はよくわかってる。それ

は俺たちが弱い存在だから。俺は、許さない。神は全てを見ている…

今は冬…厳しい季節だ。
俺たちのテントには、30 人が暮らしている。一つの布団を二人で使って、ぎゅうぎゅうで眠る。雨が降るとテントの中は水浸し。泣く人、祈る人、テントをなんとか直そうとする人。こんな哀れで悲惨な状況があるなんて！

俺たちは亡霊みたいに眠りから目覚めて、通りを歩く。まるで蛇をみたような顔をしている。みなショック状態。実際に何が起きているのか、俺たちにはわからない。一体、今、何が起きているんですか？
これは夢？それとも隠しカメラが仕込まれているドッキリ？　全部悪い夢だったら良いのに。

もし俺が死んだら…それは何のためでも、誰のためでもない。
俺はたくさんの成し遂げられなかった夢と共に、死ぬ。もっと生きたいって心で叫びながら、死ぬ。

ターミル・ナジュム

ヒバ・ダーウードの証言

2023 年 11 月 27 日

はじめはシファー病院の裏手にある自分の家にいたけど、戦車がどんどん近づいてきて、私たちの頭上を嵐のように銃弾が飛んだ。激しく黒い夜をどうにか生き延びて、朝まで耐えてから、皆で夫の一族の家に向かった。「死ぬなら一緒がいい」って言うでしょ。そこも別に安全じゃなかったけど、今、ガザに安全な場所なんてない。

2 日後、自宅にミサイルが 2 発着弾したことを知った。お金はどうにかなっても命は返って来ないので、ここに避難していてよかったと思う。翌日の夜 11 時ごろ、近くで爆竹が鳴った。みんな恐怖に震え、夫は私と二人の子どもを抱きしめた。ミサイルが落ちてきて、ガラスや天井が砕ける。少なくとも 50 発は飛んできたと思う。死を覚悟した。眼の前で火の手が上がり、ガラスが割れ、壁が崩れる。少なくとも 30 分間、私たちのすぐ目の前に死があった、紛れもない死が。

爆撃が止んだ。再開するんじゃないかってしばらく階段下のスペースに身を潜めていたけど、何も起こらなかった。イスラエル軍は爆弾を切らしたんだろうと思った。

夫はコーランを読み終え、言った。「さ、女性は寝室で寝てくれ。われわれ男はリビングにいよう」私たちはもう 3 日もろくに眠れず、へとへとだった。私は夫に言った。「そばにいて。横で眠って」 深夜1時、夫は私と、二人の子どものそばで眠った。

明け方3時、夫は他の男性がいるリビングに向かい、替わりに義理の妹が私のそばへ来た。突然、家全体を揺るがす激しい衝撃に目が覚めた。爆撃だ。あたり一面に粉塵が舞い、子どもたちは煤で真っ黒になり、私は息ができなかった。義理の妹は泣きだして、「父さんと一緒がいい、死ぬなら父さんと一緒がいい」と言う。私は部屋の扉のほうを見たが、そこには瓦礫の山しかなかった。爆弾はこの家を直撃したのだ。

瓦礫の山をよじのぼってリビングへ行くと、そこにいたはずの男たちは、全員瓦礫で見えなくなっていた。私は夫の名を呼んだ。何度も呼び続けたが、応えはない。義理の妹の夫は血まみれで、殉教者となっていた。義理の父を見つけた。まだ意識があったけど、頭を動か

し、シャハーダを唱え、微笑んでから亡くなった。めいたちは瓦礫から掘り起こしたけれど、他の家族はみんな殉教していた。一家で殉教者 9 人。殉教者 9 人、9 人。その中には生後 28 日の赤ちゃんもいる。戦争中に生まれて、戦争中に死んだ。出生証明書よりも先に死亡証明書が出された。

私の夫はなかなか見つからない。あの時、重い瓦礫をどうやってどけたのだろう。ようやく出てきた頭は、頭皮が剥がれていた。私は泣き叫び、夫の名を呼びながら石をどけていった。両足は大きな瓦礫に挟まっていた。

瓦礫を動かすと、夫がうめき声を上げた。まだ生きてる！　身体をなんとか掘り出す。頭皮は耳までちぎれていて、ひとつながりのままぶら下がっていた。私たちは救急車、民間防衛隊、赤十字社に電話をかけたが、ようやくつながっても、こう言われた。「行けません。イスラエル軍に攻撃されるから」

私は手を夫の胸に当て、痛みを和らげようとした。誰もここに来られないなら、私にできることは全てしてあげたかった。

私は朝 10 時頃まで夫のそばに座っていた。家が爆破されているので、瓦礫の山の上の私たちは外から丸見えだ。お隣さんの家が視界に入ったから、話しかけた。これからどうするつもりか、どこへ行くつもりか。

そのとき二発のミサイルが隣の家に落ちた。白旗を揚げていたのに。家は崩れ落ち、お隣さんは殉教した。耐えられない。行くべきか、とどまるべきか、何をすべきかも分からなかった。私と一緒にいるのは、重傷を負った夫、夫の年老いた母、女、子ども、夫の伯父。ただ、みんなで一緒に座っているしかなかった。

午後 4 時半、ミサイルが頭上に落ち、天井がほとんど崩れかけた！こんな危険なところにはいられない。うちよりもう少しマシな状態で残った隣の家に避難した。人生で最も暗い夜。明かりは全部消して、携帯電話もオフにして、自分たちの存在を、イスラエル兵に悟られないようにした。「朝になれば助けを呼べるから」と、とにかく暗い夜をやり過ごした。

翌朝 9 時、イスラエル軍から電話があった。いわく、「直ちに退去せよ。その家をこれから爆撃する」「私だって出ていきたい、でも夫がけがをしてるのに、こんな瓦礫だらけの道を、

どうやって移動しろと？」兵士は答えた。「知ったことか」

私たちは狂ったように駆け出した。そう、まさに狂ったように。夫は言った。「俺をここに置いていけ。もう充分だ、お前たちは自分の命を守れ」私は答えた。「神に誓って、あなたを置き去りになんてしない。一緒でなければここを動かない」、私たちはまだキャスターが駄目になってないオフィスチェアを瓦礫から見つけ出し、夫を乗せ、シファー病院に向かった。瓦礫の山の間を通って。そのとき、奇跡が起きた。私たちの方へ、白旗を掲げながら担架を持ってくる若い男性の姿が見えた。どこの誰がその男性を送り出してくれたのか分からないけど、夫を担架に乗せ、病院へ走った。ありがたいことに、本当にありがたいことに、夫の頭皮は縫ってもらえて、耳はまたくっ付いた。肋骨が 3 ヵ所折れていた事もわかり、ようやく、酸素吸入のためのチューブが与えられた。

でも目覚めたとき、夫は私のことを思い出せなかった。ふたりの子どものことも、覚えていなかった。夫の心はあまりに傷つき、深刻な精神的ショックに見舞われていた。あのとき私がどんな思いで彼のそばに立っていたかは、神のみぞ知る。

私たちは病院で数日過ごしたが、イスラエル軍から病院を今すぐ退去するよう命令が届いた。私は泣き出してしまった。どうすればいいのだろう。南のサラーフッディーン通りに向かえというが、4 歳の子どもと 5 カ月の赤ん坊と怪我をした夫を連れて、12 キロの道のりを今すぐ歩いていけなんて。 それでも自分にはできる、できるという声が聞こえた。病院を 2 時間探し回って、夫のための車いすがなんとか見つかった。これで出発できる。

しかしこのあと、私たちは、死から死へと進むことになった。本当に、死から死へ。

シファー病院を出て、イスラエル軍が「安全な経路」とか「人道回廊」とか呼ぶ道に向かったが、イスラエルは嘘をついた。あの人たちは嘘つきなのだ。

私はバッグを背負い、夫の車いすを押し、子供を連れていた。食料は全くなかった。肩はパンパンだった。サラーフッディーン通りの検問所では、ずっと立ちっぱなしで両手を上げることを強いられた。イスラエル軍は私たちを午前 11 時から午後 4 時まで待機させ、結局誰ひとり通行を許可せず、私たちに立ち去るよう命じた。どこへ？ どうやって？ いわく、「知ったことか。」

私たちは夜が迫る中、あてもなく爆撃が続く北部の危険地帯を彷徨った。結局ゼイトゥーン通りの学校に避難したが、人生最悪の夜だった。敷物一つないのに、教室のタイルは凍えるほど冷たい。学校は戦火に取り囲まれ、爆弾の金属片がこっちに飛んでくる。恐ろしい夜が終わると、朝 7 時の銃撃戦。戦車が校門のあたりに停まったのが見えた。私たちは背後でイスラエル軍が破壊行為を続けるのを感じながら走って逃げた。またガザ市へ戻り、親戚の家に身を寄せた。ただただ、一時をしのぐ場所が必要だった。みんな家を失った。私たち全員が住み家を奪われたのだ。

私は死をこの目で見た。死を見てしまった。自分自身の目で見てしまったのだ。家族の前では気丈に振る舞っているけど、実のところかなり参っている。もう心はズタズタだ。どうしてこんな悲惨なことに耐えられたのだろう。どうやって、瓦礫の中、学校の中、すべての狂気の中をくぐり抜けてきたのだろう。

爆撃を見ると思い出してしまう。火に取り囲まれたときのこと、壁が崩れてきたときのこと。今また体験しているようにまざまざと。私は母に抱きついて言った。「お母さん、私はもう見たくない。もう無理なの、耐えられない！」私たちは今、この家にひととき身を寄せているが、戦争が終わった後、私たちはどこへ行くのか、どこで暮らせばいいのか、分からない。

これが私の体験したこと。この声を広めてほしい。私たちの経験したすべてを伝えてほしい。私はこの目で、すべてを目撃した。大切な人を亡くした。家を失くした。財産を失くした。失わなかったものはただ神をたたえる気持ちだけ。

神よたたえられよ、神よたたえられよ、神よたたえられよ、私は無事です、夫も、子どもたちも無事です。私の亡くなった親族みなの魂に、神のお慈悲があらんことを。そして私たちが失くした子どもたちの魂に神のお慈悲があらんことを。神に私たち家族の無事を感謝します。神の思し召しにより、夫は良くなるでしょう。神の思し召しにより、私たちは以前よりも善い人間になっていくことでしょう。

ヒバ・ダーウード

戦争は終わるだろう！

2023 年 12 月 31 日

戦争はいずれ終わるだろう。その時、人々はかろうじて残った家と家族のもとに戻る。子どもたちも学校に戻る、校庭から血と遺体のきれはしが片付けられたら。
お隣さんもきっと普段通りに朝、店を開ける。ただし冷蔵庫は使えない。お店で最も重要なものなのに。道、電柱、水道といったインフラが、根こそぎ破壊されたせいだ。人々はこれからどうやって身体を洗うんだ？　元々悲惨だった水道や下水道を、せめて元の状態に戻すのでさえ、どれほど時間とお金がかかるか。

戦争はいずれ終わるだろう。その時、農民は自分の畑に戻る。戦車の轍を消し、肥料をまき、不発弾や爆弾の残骸を取り去る。運転手は自分のバスや車に戻り、瓦礫の中から新しい道を探す。

戦争はいずれ終わるだろう、きっと私たちは何年もかけて、壊された建物も、道も、学校も、それから塔も、全てを元通りに、いや、かつてよりもいいものに戻すだろう。
けれども人間は、かつてのようには絶対に戻らない。戦争が私たちの子どもを、隣人を、友達を連れ去ったから。戦争は私たちの魂を連れ去った。私たちに残されたのはただ待つこと。この戦争が終わる日を、残りの人生をゆっくりと死に向かって歩める日を。ただし一生忘れることのできない記憶を胸に抱えたまま。

言葉はきっと残るだろう、私たちの対話と記憶のために。しかしあまりに度重なる戦争、追放、どんどん遠ざかる故郷への帰還の夢、そしてナクバ：大惨事。一体どれのことを話しているか、わからなくなるかもしれない。イスラ

エルが建国を宣言した 1948 年の一回目のナクバか、それとも二回目…2023 年のことか？ イスラエルが私たちをガザに追放した 1948 年以前の故郷の村に戻るのか、それともガザに戻るのかを？！
それでも、私たちの子孫に伝える言葉を見失うことはない。子供たちに語るのが、一回目のナクバでも、二回目でも、断じてあってはならないが、三回目であっても。

何千人もの母親が生活に戻るだろう、還ることのない子どもを待ち続けながら。子どもたちが悪夢に叫ぶ夜がどれほど続くかはわからない。手足を失った何千人もの男、女が生活に戻るだろう、一生続く不自由さの痛みに苦しみながら。
戦争はいずれ終わるだろう。そして私達は戦争が引き起こしたあらゆる病気に苦しみ、抗い続けるのだ。

戦争は地上では終わるだろうが、私たちの記憶と、心と、魂では永遠に終わらない。かつてあったように戻ることは、絶対にないのだ。
戦争はすべてをあらわにする。道路をむき出しにしただけではない。人間の本性を、信義を、何に属しているのかを、そして誠実さをあらわにする。
戦争は終わるだろうが、人間が、かつてあったすべてを取り戻すことはない。
戦争は地上では終わるだろうが、私たちの中で終わることはない。

戦争は終わってはいない、が、私たちは新しい年を迎えて、新年おめでとうと挨拶する。毎年おめでとうと言い続ける、残念ながらどの年も私たちにはおめでたくないのだが。

新年、あけましておめでとうございます。

アリー・アブー・ヤースィーン

物語はまだ終わっていない。

2024 年 1 月 24 日

私の姉を覚えてる？ほら、自分の家の瓦礫の下から何とか引っ張り出されて、家族と一緒に南に向かった彼女をーーその方が安全だってあの人たちが言ったから！
戦闘休止期間が終わった翌朝、私は姉が、夫と子どもと一緒に死んだと聞かされた。イスラエル軍が避難先の居住区を爆撃したって。生き残ったのは、彼女の 10 歳の長男だけ。爆発の破片で目を負傷したらしい。
ショックだった。私の姉、私より 2 歳年上の大切な姉は、いつも私と一緒だった。なんでも一緒、職場まで一緒だった。姉は殉教者！そう呼ばれるにふさわしい。誰からも愛され、蟻さえ傷つけることができない天使のような人だった。

悪夢はまだ終わっていない。私たちが避難した場所にも戦車が近づき、至る所で砲撃を行うので、家族でガザ市の西側に戻ることにした。戦車が撤退し、安全になったらしいから。私たちは爆撃の下を行き、銃弾は何度も周りの地面にさく裂した。そうやって死ぬ思いで戻った場所は、人が住めるような状態じゃなかった。電気もない、水道もない。でもこれが生き延びるための唯一の選択肢だ。
医者である私の父は、私の夫の耳は完全に駄目になっていて、手術が必要だという。手術は国外でしかできないれど、ガザの北部と南部が完全に断

絶された今、私たちはこのガザ市の外にすら出られない。

　戦争は終わっていない。今週、戦車が私たちの近くに戻ってきた。とても不安だ。彼らは家に入って、老いた男も若い男も殺していく。
私たちはもう、ここにとどまることにした。だって安全な場所なんてどこにもない。ただ死から死へと逃げているだけだ。

ガザにて　　ヒバ・ダーウード